

ヘーゲルの言う矛盾 (1) —— 『論理学』における矛盾の分析

Der Hegelsche Begriff des Widerspruchs (1)

— dessen Analyse in seiner *Wissenschaft der Logik*

竹島 尚仁

TAKESHIMA, Naohito

はじめに

ヘーゲルが矛盾律の廃棄を主張した哲学者であるという誤解はいまだに残存している。もし本当にそうであるなら、そこには意味をなす考えは何も見当たらず、彼のテキストを読むことはほとんど不可能であり、ヘーゲルの哲学から何も学ぶことはできないであろう。

なるほど、ヘーゲル自身、矛盾を積極的に容認するような主張をいたるところで行っている。教授資格取得討論のテーゼのひとつに、「矛盾は真理の規則であり、無矛盾は虚偽の規則である」とある。イェーナ期の差異論文において、絶対者を意識に対して構成することを哲学の課題としたとき、たんなる反省による接近が矛盾に陥らざるをえないと指摘していた¹。そして『論理学』においては、矛盾は存在しないという一般の見解に対して、矛盾が「あらゆる経験、あらゆる現実的なもの、および各々の概念のうちに見出されざるをえず」²、日常の経験でさえもが「矛盾した事物、矛盾した組織等々が存在している」³ことを告げていると言う。そして彼によれば矛盾は「あらゆる自己運動の原理」⁴であり「絶対的活動性」⁵なのである。

その反面、彼が同時に矛盾の解消をも主張していることは、見過ごされがちである。矛盾を解消することによってある統一（否定的統一）が成立し、それが「事物、主観、概念」として把握されることになる。そしてこれらもまた有限のものであるかぎり、より高次の統一にもたらされる⁶。ヘーゲルによれば、矛盾に陥るのは悟性であり、理性はそこにたんなる無を見るのではなく、矛盾を洞察し、それを統一的に把握するのである。

ヘーゲルの言う矛盾をめぐる議論のうちでは、とりわけ矛盾律を犯しているという批判と矛盾の存在化を行っているという批判が際立っている。フルダは、社会批判における弁証法論理の説得力があ

¹ 同一性の命題 $A=A$ はすべての不等性を捨象するが、同時に不等性の定立をも要請する。そこで定立されるのは $A \neq A$ すなわち $A=B$ という命題であり、これは $A=A$ と即座に矛盾する、とヘーゲルは言う。

² G.W.F. Hegel, *Gesammelte Werke*, Band 11, hrsg. v. F. Hogemann und W. Jaeschke (1978), 287. 以下 GW11 と略記。

³ GW11, 287.

⁴ GW11, 287.

⁵ GW11, 289.

⁶ Vgl. GW11, 289.

るとしても、だからと言って矛盾の存在化を認めることはできないと言う⁷。ヘースレは、ヘーゲルが矛盾律を受け入れており、そして自己矛盾する存在者が存在することを認めたと言う⁸。ヴィーラントは、ヘーゲルの言う矛盾を命題Pと命題 \sim Pとの間の矛盾ではないと考えている⁹。ローゼンクランツも、ヘーゲルが自己矛盾する概念が真ならざるものでなければならないという真理に異論を唱えることはなかったと明確に述べている¹⁰。加藤もヘーゲルの言う矛盾はなんら矛盾律に抵触するものではないと主張する¹¹。ヴォルフもまた、ヘーゲルの言う矛盾は矛盾律に反するものではないと分析するが、さらにそれが真の矛盾であると考えている¹²。同様に高山も、ヘーゲルの矛盾がアリストテレスやカントの論じた矛盾ではないという。そしてローゼンクランツ以来の矛盾解釈、すなわち「自立存在の他者依存性」という解釈を根源的な矛盾解釈ではないと言う¹³。

ヘーゲルの矛盾をめぐる議論に終止符を打つためには、加藤が述べるつぎの研究手順が重要であることは疑いえない。①ヘーゲルが「矛盾の真理性」を語っているテキストを、彼の自筆著作から完全枚挙する、②そのテキストを解説して、見かけの矛盾を摘発し、論理的に矛盾ということのできる事例を残す、③論理的に矛盾といわざるを得ない事例について検討する¹⁴。本稿ではこのような研究手順の一環として、まずヘーゲル自身による矛盾の説明に立ち返り、その説明を正確に理解することを行うことにしたい。そのためには『論理学』の本質論における「矛盾」の節に立ち返ることが最良である。それによって、ヘーゲルの言う矛盾が擬似矛盾でないのかどうかをまず明らかにしようと思う。それが擬似矛盾であるなら、ヘーゲルが矛盾律を犯している、あるいはまた矛盾を存在化していると

⁷ Hans Friedrich Fulda, „Unzulängliche Bemerkungen zur Dialektik“, (hrsg. von Rolf-Peter Horstmann), *Seminar: Dialektik in der Philosophie Hegels*, 2. Aufl. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1989 (im folgenden Horstmann (1989)), 41.

⁸ Vgl. Vittorio Hösle, *Hegels System. Der Idealismus der Subjektivität und das Problem der Intersubjektivität*, Hamburg: Felix Meiner, 1988, 156ff.

⁹ Vgl. Wolfgang Wieland, „Bemerkungen zum Anfang von Hegels Logik“, Horstmann (1989), 196.

¹⁰ Karl Rosenkranz, *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977 (Nachdr. der Ausgabe Berlin 1844), 156. (K・ローゼンクランツ (中埜肇訳)『ヘーゲル伝』、白水社、148-149頁)

¹¹ 加藤尚武、「エンゲルハルト論文の吟味」、『ヘーゲル論理学研究』第15号、2009年(以下、加藤(2009))、63-71頁。エンゲルハルト論文では——残念ながら未入手でありまた未公表のためオリジナルを読めていない——ヘーゲルの言う矛盾をめぐる三つの立場がまとめられている。①真なる矛盾が存在するのであり、それどころか弁証法はそのような想定に基づく、②矛盾はたんに悟性的思维において現れるのみであり、理性的思考においては矛盾は現れないのであり、弁証法そのものは矛盾を犯すことに基づくのではない、③ヘーゲルが矛盾一般の客観性を認めているとは考えず、むしろ弁証法は有限な思考においてたんに見かけ上矛盾として現れているだけのものを解消するための一つの方法であり、したがって矛盾は乗り越えられるべきものであって、弁証法には矛盾を犯すという内容は含まれない。本稿もエンゲルハルト論文に対する応答に刺激を受けて書かれたものであるが、下敷きとなったのは、私自身が博士論文『論理と世界』において行った矛盾の分析とその帰結である。

¹² Michael Wolff, *Der Begriff des Widerspruchs—Eine Studie zur Dialektik Kants und Hegel*, Meisenheim: Anton Hain, 1981. (M・ヴォルフ (山口祐弘他訳)、『矛盾の概念』、学陽書房、1984年、33頁)

¹³ 高山守、「存在と矛盾」、『理想』641号、1989年(以下、高山(1989))、28、33頁。また、高山守、『ヘーゲル哲学と無の論理』、東京大学出版会、2001年、第一章第三節、第六章第三節三。

¹⁴ 加藤(2009)、66頁。

いう非難そのものが空しいものであることになるであろう。

本稿の結論としては、ヘーゲルが矛盾律に抵触するような矛盾を主張してはいない解釈を追認することになる。しかし本稿がこの論争に対して何らかの寄与をしているとすれば、どこからそのような疑似矛盾が生まれたのか、そしてなぜそれが疑似矛盾でしかないのかをテキストに即して克明に示そうとする点である。また、ヘーゲルの言う矛盾が本来的な矛盾¹⁵と言えるのかどうかは本稿の範囲を超える課題であるが、それがどのような事態（関係性）を表すのかを示そうとする点である。

以下では矛盾を理解するために、その前段階である対立概念をおさえておく。対立概念の理解によって矛盾の理解は容易になるし、対立のうちにすでに矛盾関係が伏在していると考えられるからである。まずは、ヘーゲルが対立概念によってどのようなことを説明しようとしたかを導入として示す（1）。ついで『論理学』本質論における対立概念を分析する（2）。それをうけて同所におけるヘーゲルの矛盾概念を分析し、それが矛盾律に反するような矛盾ではないことを示すとともに、どうして矛盾であるかのように誤解されうるのかも示す。そして、そのような矛盾の思索がどのような事態（関係性）を表し、それにどのような合理的な意味があるのかについて示唆を行う（3）。

1. 対立概念への導入

ヘーゲルは、対立という反省規定を導くうえで、或るものが他の或るものと比較されるという次元を考察している。そこでは相異性（Verschiedenheit）という、区別（Unterschied）の一形態を考察している。或るものが何か別の或るものと相異したものであるとき、そこには、或るものが他のものと異なるという不等性（Ungleichheit）という側面と同時に或るものが他の或るものに等しいという相等性（Gleichheit）という側面とが現れる。これは、われわれが抽象概念のみならず日常的な個物をも比較し、それらの共通点や相違点に注目するときに生じている事態と重なる。ヘーゲルが差異性という区別について重要な特徴としてあげるのはつぎの二つである。第一に、二つのものの相等性も不等性も、両者を比較する外的反省（主観）のうちにありと捉えられ、対象そのものの規定であることが忘れられているということである。第二に、相等性と不等性が関係規定としてそもそも対立関係にあり、相互に切り離して捉えられず、そもそもひとつの反省（あるいは同一性）のうちでのみ成立するような関係規定であるということが忘れられているということである。

たとえば、赤、青、黄、等々という色規定を考えてみる。それぞれは一つの色であり、そのかざりで他の規定に等しい。またそれぞれは相異なる色であり、他の規定と等しくない。これは日常の感覚知覚のうちに現れる多様性であり、非常に基本的な区別の段階である。それらは、たとえば補色といった特別な関係性ぬきに捉えられており、ただ相異なるという関係性のもとでしか捉えられていない。

さらに、上、下、右、左という規定を考えてみる。それぞれは一つの場所であり、そのかざりで他

¹⁵ 高山（1989）、28頁。

の規定に等しい。それぞれは同時に相異なる場所であり、他の規定と等しくない。しかしそれらはただ相異なるという関係性のもとで捉えることもできるが、さらに規定の対立関係に着目することもできる。上と下、右と左は対立関係にあり、そして対立関係にあることによってその規定が成り立っているのであるから、さらに対立という区別の別形態を考察する必要性も容易に納得できるであろう。

相異性における同一性と区別、すなわち相等性と不等性が、互いに没交渉な関係性ではなく、さらに限定された関係性すなわち対立関係に入るのは、比較する外的反省が捉えていた二側面が或るものと他の或るもの自体に内在化されること、いわば反省された側面が対象へ繰り込まれることによって。つまり対象にとって外的であったこの二側面が対象自身の関係性として捉えなおされることによって、対立が導かれる¹⁶。そして対立は、後節（次号掲載予定）で論じる矛盾の構造を懐胎する。

ヘーゲルは対立をこう定式化している。

「没交渉な（gleichgültige）〔両〕側面が同様に端的にただ否定的統一の契機であるような相異性（Verschiedenheit）は対立（Gegensatz）である。」¹⁷

あるいは、

「区別の契機は、ひとつの同一性において相異したものである。こうして両者は対立したものである。」

対立において重要なのは、区別の契機（同一性と区別）が、両者の「否定的統一」あるいは「ひとつの同一性」のもとで捉えなおされている点である。ひとつの同一性とは、区別の両契機を成立させる基盤となるものである。逆に相異性においてはこの同一性は顕在化していなかった。なぜなら或るものと他の或るものはこれこれの点で同じであり、これこれの点で異なっていると述べるだけで、この相等性と不等性がともに成立する基盤については考慮されていない。それだからこそ相等性と不等性とは互いに没交渉な側面として他方との関係なしに現れてしまう。しかし対立関係を捉えるにはそれでは不十分である。そのためには、同じ或るものと他の或るものを反省する同一な観点のうちで、相等性と不等性は捉えなおされなくてはならない。

こうして区別の契機は対立の契機へと形を変え、それは「肯定的なもの（das Positive）」と「否定的なもの（das Negative）」であると捉えなおされる。さしあたり両者は次のように定義されている。

「この自己へ反省した自己との相等性は、それ自身のうちに不等性への関係を含み、肯定的なものである。同様にそれ自身のうちにその非存在すなわち相等性への関係を含む不等性は、否定的なものである。」¹⁸

相異性をかたちづけていた相等性と不等性が、基本的に肯定的なものと否定的なものに引き継

¹⁶ もちろんすべての不等性が対立関係にはいるというわけではないであろう。にもかかわらずヘーゲルの議論がいれば同一平面上で進んでいくように見えるために、反対対当と矛盾対当の区別が忘れ去られているように見える。

¹⁷ GW11, 270.

¹⁸ GW11, 273.

がれている。そして、ともに他方への関係が含まれているという点で、相異性の段階における相等性と不等性の捉え方とは異なっていることが分かる。

たとえば上と下が対立関係にあるとする。先の引用に即していえば、上と下の相等性は場所であり、不等性はほかでもない上と下によって表されていると言ってよいだろう¹⁹。さて上が何であるかを語ろうとすると、上は上であると繰り返しても、それを規定したことにはならないので、さらに上は下ではないと言ったとする。下についても同様に、下は上ではない、と。しかしここで気づかされるのは、上も下も相互的な否定関係によって、互いに他でないということを述べているに過ぎず、せいぜい対立しあうものであると言っているだけである。これでは堂々巡りであって、上と下を本当に区別しきれていない (1.)。

では、自分が立っているとき、頭のあるほうが上で、足のあるほうが下だとすれば、上と下の固有性²⁰を表すことができるかもしれない。しかし、上や下という規定を私にとって相対的に表すだけでは、本当に両者の規定を表したことにはならない。というのは、もし私が逆立ちをしていたなら、最初述べた上が下であり、最初述べた下が上であると語ることが可能になってしまうからである。つまり上と下が、場所そのものの客観的な規定ではなく、私にとって便宜的に交換可能な規定となっている (2.)。

上や下はたんに私にとって相対的であるにすぎないものではなく、客観的な固有の意味をもち、上は上であり、下は下であり、互いに交換不可能で固有な意味をもつはずである。たとえば、下を重力中心に向かう方向、上をその逆方向と定めることができるであろう (3.)。

2. 対立概念の分析——他者が存在するかぎりで存在することと他者が存在しないかぎりで存在すること

では、上や下といった対立概念の事例²¹はさておき、そもそも対立の契機であるとされた、肯定的なものと否定的なものについて、その固有性は一体どのようにして論理学内部で表現されるのであろうか。

ヘーゲルはその過程を三つの段階を追って説明する。実は、前節末尾の事例の説明は、その段階を先取りして示したものである。

第一段階では、肯定的なものと否定的なものが「定立された存在」であるとされている。そのこと

¹⁹ Vgl. GW11. 288.

²⁰ 「固有の」意味(GW11. 275, 277)に関連させて考えている。

²¹ ヘーゲルは、肯定的なものと否定的なものの具体例として、正の数(+a)と負の数(-a)を挙げている。この例は、プラスの数とマイナスの数が相互に還元できない固有の意味をもつことを示すうえで分かりやすい。ヘーゲルはそれに先立ち、対立の第一段階、第二段階に即して正の数、負の数をを用いて説明を行っている。とりわけ対立関係の基盤をなす「ひとつの同一性」が絶対値|a|を想定しながら説明を行っているように読める。M・ヴォルフは前掲書でこのような想定をもとにヘーゲルの矛盾概念の分析を進めた。

は、両者が互いに他者によって定立されていることを意味する。ただし両者は、相互的な依存関係のうちで捉えられているにすぎず、ただ「対立する者一般」であるとししか捉えられていない。ここには両者の固有性はない。

第二段階では、両者が互いに没交渉であるとされている。両者は互いの対立関係を離れて存在するかのように捉えられていることになるから、ある意味では相互に自立的な在り方を達成しているとも言える。しかし、両規定が対象に内在的であると捉えられず、外的にラベルのように張りかえ交換してしまえるような規定であるとししか捉えられていない。そしてそれは同時に対立関係そのものを支える「ひとつの同一性」あるいは「否定的統一」にも関わりなく存在するかのように捉えられてしまっている。

第三段階では、両者が定立された存在であり、同時に互いに没交渉な存立でもあることを総合するような仕方で成立する。定立された存在とは他者によって定立されていることであり、他者への関係を本質としている。そうした関係を、自立的に存立する両者が取り戻すことによって、それぞれが肯定的なものという規定性ならびに否定的なものという規定性を持ち、本当の意味で自立的な反省規定としての肯定的なものと否定的なものとが成立する。

ヘーゲルが説明する対立の三段階の素描は以上のとおりである。三段階の説明²²を細かく追跡するのは本題ではないので、ここでは矛盾に引き継がれる構造としてとりわけ重要な第一段階の説明に注目しておきたい。

ヘーゲルは、肯定的なものと否定的なものという対立項のうちに二つの側面をとりあげ、つぎのように整理している。

「〔1〕各々は一般に第一に、他者が存在するかぎりで存在する。〔2〕各々はその他者を通じてすなわちそれ自身の非存在を通じて、それがそうであるところのものである。〔3〕各々はただ定立された存在である。第二に、〔4〕各々は他者が存在しないかぎりで存在する。〔5〕各々は他者の非存在を通じて、そうであるところのものである。〔6〕各々は自己内反省である。」²³

対立項の各々が、定立された存在として存在すると同時に、自己内反省として存在することが言われている。反省規定が一般にそうであるように、それが他者によって媒介されているということとその媒介から自立的に存立するという両側面がここでも反復されていると考えられる。

対立項の二つの側面がそれぞれ三つの文(〔1〕～〔3〕と〔4〕～〔6〕)でまとめられている。ただしここには、存在言明(～が存在する)と述定言明(～が…である)が混在しているように思われる。まず〔1〕「他者が存在するかぎりで存在する」と〔4〕「各々は他者が存在しないかぎりで存在する」との対比に着目してみよう。両者ともに、ただ肯定的なものと否定的なものの存在言明を行い、

²² なお、対立の三つの側面は、第一の段階が定立的反省に対応し、第二の段階が外的反省に対応し、第三の段階が規定的反省に対応するという構成になっている。

²³ GW11. 273.

同時にそれぞれ異なる存在するための条件を述べているように見える。

〔1〕の文言は、さしあたり一方の規定が存在するなら他方の規定が存在するということを意味し、両者の相互依存関係を述べていると考えられる。肯定的なものと否定的なものはそれぞれ対立関係にある他方の規定がなくなってしまうばそれ自身もなくなってしまうであろう。したがってこの文言は容易に受け入れることができる。そしてこうした相互依存関係のゆえに、各々は他者すなわち自分の非存在によって定立されているわけである（〔3〕）。

ところが〔4〕の文言は容易に受け入れることができない。第一で述べたことと矛盾したことを述べているようにみえるという表面的な理由のみならず、実質的に考えてみても各々は他者がなければそれとしては存在しえないはずだからである²⁴。それでも〔6〕にあるように、自己内反省ということで各項が存在（存立）するということが語られていることは間違いなさそうなのである。

そこで、〔1〕と〔4〕が対立項の存在言明を行っているとして理解してよいのかどうかをあらためて問う必要がある。そのために、〔2〕「他者を通じて……そうであるところのものである」と〔5〕「他者の非存在を通じて、そうであるところのものである」との対比に着目してみる。ここでは「～そうであるところのものである」というように、先ほどと異なり存在言明ではなく、対立項の意味内容について述定言明²⁵を行っている。この観点から解釈していくと、〔5〕「他者の非存在を通じて、そうであるところのものである」は容易に理解できる。肯定的なものは否定的なものではないことを通じて、それが「そうであるところのもの」すなわち肯定的なものである。否定的なものについても同様である。〔2〕「他者〔の存在〕を通じて……そうであるところのものである」はどうか。肯定的なものは否定的なものであることを通じて「そうであるところのもの」すなわち肯定的なものである。これは容易に受け入れることはできない。

「存在する」と「である」に焦点をあてそれぞれの観点から整合的な解釈を試みたが、ヘーゲルが対立項の存在について説明しようとしているのか、それとも意味内容について説明しようとしているのか、画一的な解釈は難しいことが分かった。それでは、ヘーゲルはまさに矛盾したことを通説どおり述べているのであり、このような説明になんの合理的な意味も見出せないのであろうか。そうではない。

²⁴ もちろん、なにか或るものとしては存在しえるであろうが、肯定的なものあるいは否定的なものとしては存在しえない。

²⁵ 述定（Predikation）ではなく包摂（Subsumtion）と捉えるのが正確であるが、ここでは、そのことよりも存在（Existenz）の言明ではないことが重要である。

何よりも強調されねばならないのは、肯定的なもの・否定的なものの意味内容そのものの存在²⁶と意味内容とを切り離して考えることは事態の本質を見誤ることになるという点である²⁷。なぜなら、肯定的なものという意味内容が存在することは、まさしく否定的なものという意味内容ではない独自の意味内容をもつことによっているからである。つまり肯定的なものの存在は否定的なものではないことによっているからである。自立的に肯定的なもの・自立的に否定的なものが存在するためには、それぞれの内容規定が確定されていることが不可欠である。

そこで先の引用について合理的な解釈を総合的な観点から施すとすれば、それは、対立項の存在と同時にむしろ意味内容に重心を置いてつぎのように解釈できるのではないだろうか。対立項のそれぞれが「他者が存在するかぎりで存在する」とは、対立項がそれぞれの「他者によって」そうであるところのものであり、それゆえ存在する。「他者が存在しないかぎりで存在する」とは、対立項がそれぞれの「他者の非存在によって」つまり他者でない²⁸ことによってそうであるところのものであり、それゆえ存在する、と。

こうして最終段階において、肯定的なものと否定的なものは、自立的な反省規定としてつぎのように捉えられている。

「肯定的なものと否定的なものは、〔1〕定立された存在であるだけでも、〔2〕没交渉なものであるだけでもない。〔3〕それら自身でないところの統一における定立された存在あるいは他者への関係は、各々へ取り戻されている。どちらもそれ自身において肯定的でありまた否定的である」²⁹

引用中の〔1〕〔2〕は対立の第一、第二段階に、〔3〕がその第三段階に対応する。このような過程を通じて、対立項は他者への関係を取り戻した自立的な存在となるのであるが、両者の固有な意味そのものはそれぞれつぎのように説明される。

「肯定的なものはたしかに定立された存在ではあるが、しかしそれにとっては定立された存在は揚棄されたものとしての定立された存在にすぎない、という具合にである。肯定的なものとは対立

²⁶ ヘーゲルが『論理学』において諸カテゴリーの形而上学的な意味を考察していることは疑いえないが、そもそもその分析にあたってどのような意味での存在を考えておくべきであろうか。陽極・陰極のような物理的な意味での存在なのか、プラス・マイナスのような数学的な意味での存在なのか、広くそうした存在を包括する形而上学的な意味での存在なのか、それとも文字通り肯定・否定のような（とりあえず現実には妥当するかどうかを問わなくて済む）意味論上のあるいは論理上の存在なのか。私自身は、前二者が『論理学』の直接の対象でないことは明らかであるし、そして第三のレベルが『論理学』の対象であるとしても、最後のレベルが『論理学』においてまず成り立たないといえないものであると考えているので、以下本稿では肯定的なもの・否定的なものの意味内容を考察の中心に据えることにする。

²⁷ もちろん、それらの存在と意味内容とを切り離して考えてはいけなくとも、区別することが拒まれるわけではない。

²⁸ ヴェン図を思い描いて、肯定的なものは否定的なものが存在しないところに存在する、と解釈することも可能である。しかしその解釈は、実質的に肯定的なものが否定的なものではないということに還元されると考えられる。

²⁹ GW11. 274.

していないもの (das Nichtentgegengesetzte) である。……たしかに或るものは他在への関係のなかで肯定的と規定されるのであるが、しかしこのあるものの本性は定立されたものではないということである」³⁰

「否定的なものは、それ自身がもはや定立された存在……ではなくて自立的な存在である。それだから肯定的なものを否定する自己への反省はこの自分の非存在を自分から排除することであると規定されている。……自己内反省としてそれは他者への関係を否定する。……否定的なものはそれだけで存立している対立したものである……」³¹

まず肯定的なものは、他者によってその意味内容が定まりそして他者によって存在するがゆえに、定立された存在である。ところが、肯定的なものが肯定的なものであり、固有の意味をもつのは、他者によって定立されていることが覆い隠され、対立関係を免れているものとして捉えられているからである。つまり、肯定的なものの固有の内容規定は、定立されているということが揚棄されている（定立されたものではない）ということ、あるいは対立していないということなのである。

他方否定的なものは、肯定的なものと同様に定立された存在であることには違いがない。しかし否定的なものは、自分の非存在すなわち肯定的なものを自分から排除することによって、この定立されているということを否定してしまう。この排除は他者への関係を否定することであり、それによって自己へと反省し、「肯定的に自己自身にやすい」³²それだけで存立するものとなる。そして否定的なものの固有の内容規定は、自分の非存在すなわち肯定的なものを自分から排除することであり、対立しているということなのである。

ヘーゲルは以上のように幾分手間にかかる仕方で、対立の契機である肯定的なものと否定的なものがどのような関係性を通じて成り立っているのかを示している。要は、定立されていることと自己へと反省していること、ひろく言えば他者へと関係していることと自己へと関係していることという規定に含まれている関係性が指摘されたわけである。肯定的なものと否定的なものは、その関係性の一面を覆い隠すような仕方で自立的な存立をもつようになっていることが示されたのである。しかしそのような説明は、両者がそれぞれにおいてそもそも矛盾していることを示すための前置きのようなものであると言えるかもしれない。というのは、次節でみるヘーゲルの言う矛盾は、まさに対立関係の説明のなかに現れた関係性をそのままうけとめ、そこに伏在する矛盾を知らしめるという体裁になっているからである。

(以下次号)

³⁰ GW11. 274.

³¹ GW11. 274-275.

³² GW11. 275.